

KONDO HOUSE

塚田真樹子
MAKIKO TSUKADA

夫婦と子ども1人、ご主人のお父さまの4人のための住宅である。

敷地の北側にある4m道路は、近くにある学校の子どもたちが登下校に使う道路で、朝晩は賑やかな通りとなる。そのためか、最初のご夫婦の要望の中に“中庭”というものがあった。

限られた敷地面積の中に置かれる“中庭”が一般的なものでは、暮らしに制約も多いのではないかと常々感じていた。そこで、今回は“中庭”というものの定義を再考し、この住宅に必要な要素のみを抽出して採用することを検討してみた。その結果、柔らかい光と穏やかな空気を室内に与える機能、そして各部屋を柔らかく区切る役割のみでいいのではないかと感じた。

この建築の構造は、柱脚の固定度が非常に高い2組の鉄骨フレームを立て、そこから外周壁と2階の床を吊るという工法をとっている。この工法により、外壁を地面から浮かせることができ、更に自由な位置に開口を設けることが可能となった。また、内部空間から1階・2階とも柱を取り除くことと、2階の床をレベルを変えてふわりと浮かせることが可能になった。

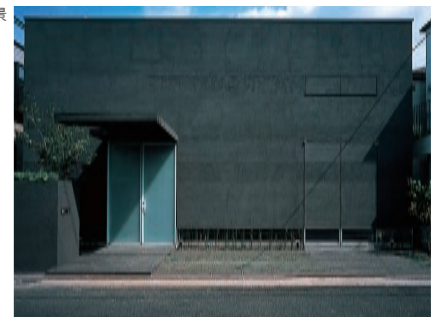
この中に上から光と外気を呼び込む機能として、ガラスの箱を差し込み、一部

は大胆に開放できるサッシを組み込むこととした。周りに構造材のないガラスの箱は、非常に軽やかで、その存在が曖昧になり、天井からのぞく空の景色のみが、そこが外であると感じさせる。レベルを変えた床の隙間からの視線の抜けと、軽やかなガラスの組み合わせにより、空間全体の大きさが曖昧になり、実際以上の広さを感じさせているように思う。

白い内部空間の中で、床やリビングを囲う壁には無垢の木製板を使い、“ニワ”をつくり出すものは、それとは対比的に、透過した光を魅力的に変えるガラスコップのようなものが置かれている状態にしたいと考えた。最終的には内外を区切るのが15mmの厚さのガラスとなったため、多少、重量感は増したものの、上からの光が時として褐色に塗装した床にその輝きを落とし、互いにその存在を高め合っているように感じる。

お父さまのご要望の中のひとつに、「浴室に鏡を！」…があった。これに関しては、素直にそのまま両開きの扉全面に鏡を張り、これを全開すると“ニワ”とつながるという仕掛けを施した。浴室の壁は、不思議なきらめきをするタイルを使って、柔らかく降り注ぐ外からの光やガラスの輝きと呼応させている。*

北西面全景



1階浴室

1階トイレ

つかだ・まきこ—塚田真樹子建築設計 主宰/北海道大学工学部建築工学科卒業。1986～89年、大林組構造設計。1989～93年、竹山実建築総合研究所。1993～94年、坂茂建築設計。1995年、塚田真樹子建築設計。
主な作品：M&M HOUSE (1996)、L&L HOUSE (1998)、U&U HOUSE (2000)、F&F HOUSE (2002)、G&G HOUSE (2003)、V&V HOUSE (2004)、Z&Z HOUSE (2006) など。

■建築概要

名称：KONDO HOUSE
所在地：東京都世田谷区
家族構成：夫婦+父親+子供1人
敷地面積：142.80㎡
建築面積：77.82㎡
延床面積：154.38㎡
規模：地上2階
構造：S造
工期：2007.4～2008.6
設計：塚田真樹子建築設計
施工：カフペホームズ

●INAX使用商品●壁タイル：ナミナ NA-200/1、床タイル：サーモタイルクォーツ ITF-200/ST-32、陶器染 TBK-630/3、便器：サティス

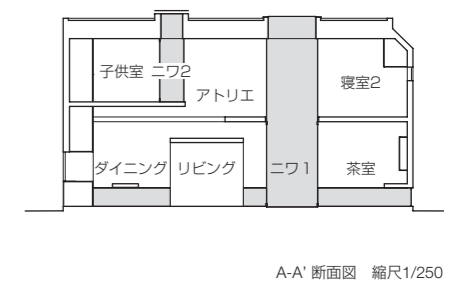
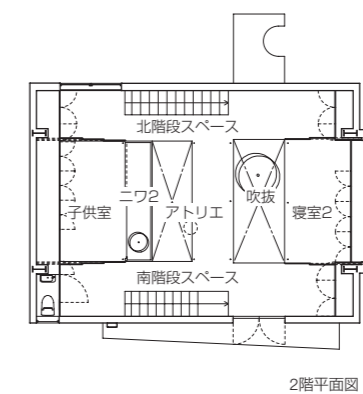
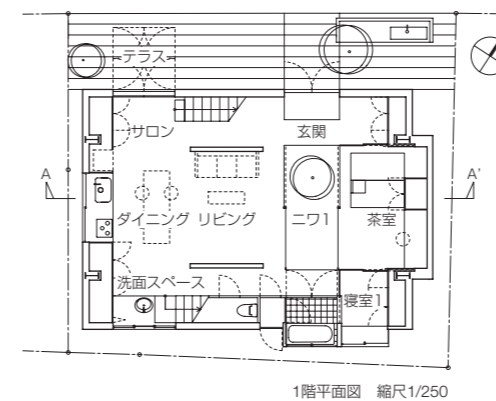
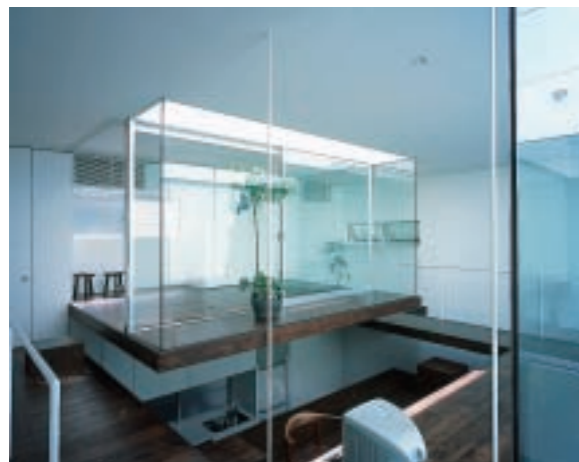
KONDO HOUSE

設計：塚田真樹子建築設計



1階サロンからリビングを見る。奥はニワ1、更に奥には寝室1が見える

左—2階南階段スペースからニワ2を通して子供室を見る
右—ニワ1



赤の家

設計：松下希和/KMKa一級建築士事務所



リビング・ダイニングからキッチンを見る。左は子供部屋。右手の窓の外にテラスが広がる

左—2階共有スタディ
右—子供部屋を見る。リビング・ダイニングとは引き戸によって仕切られる



House & Home

子供の家
家族の家松下希和
KIWA MATSUSHITA

西面外観

左—1階洗面所 奥はトイレ
右—1階トイレ

1歳から5歳の4人の男の子たちが共働きの両親に見守られながら成長していく家——それにはどんな家がふさわしいのだろうか？

個室の代わりに大きな共有の子供部屋を——というのがクライアントからのリクエストだった。忙しい両親が家事などをこなしながらも、傍らで遊ぶ子供たちに目が行き届くような、家族が集まる場所が中心の家。家の外観は東西から見ると家型で、外装の羽目板には一面赤い塗装を施し、この“大きな赤い家”の中の北側に、子供部屋である“小さな赤い家”を入れ子状に配置することとした。朝、“小さな赤い家”の雨戸のような引き戸を開け放つと、大きな開口でリビング・ダイニングとつながり、その先のテラスも含めた大きな遊び場が出来る。子供部屋には4人の子供たちそれぞれに専用のクローゼットと窓があり、将来、必要に応じて、分割することもできるように計画されている。

子供部屋の上は家族共有の勉強部屋で、ここは、天井の高い広々としたリビング・ダイニングと対比した、屋根裏部屋のようなスペースとした。吹抜けを介して1階にいる家族の気配を感じながら

も、ふと落ち着ける部屋になるように考えた。また、1階の大きなリビングの脇には、家具を介して小さな和室が緩やかにつながる。完全に独立した部屋でなくても、少し視線や動線をずらし、ちょっと1人になれるスペースも時には必要であり、こうすることで、大家族の楽しさを共有しながら、1人の落ち着きも得られる家となったと思う。

また、忙しい両親の子育てを少しでもサポートする器として、機能が重視された。内部の動線は、洗面所から通用口までのリビングに平行なX軸方向（家事動線）と、テラスから階段へ続くY軸方向にまとめることで、明快で効率的になるようにした。外から子供が泥だらけになって帰ってきても、その汚れをリビングに持ち込むことなく、水場に直行できるようにと、浴室や洗面所は玄関や通用口の近くに配した。通用口脇の手洗いには、小さい子供がシンクに手が届きやすいように、スライド式ステップの付いた洗面化粧台「ピアラ」を採用した。成長期の子供を抱える家族にとって、機能的な水まわりの計画は、生活の中で大きな役割を果たすであろう。

キッチン作業しながらも、スクリ

ーン越しに子供部屋やリビング・ダイニング、またテラスで遊ぶ子供たちを見守ることができるが、子供が小さいうちは容易に中に入れないように、コクビットのようなイメージで計画した。

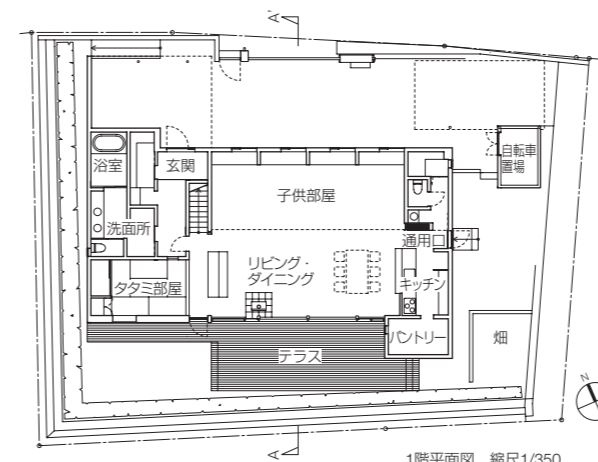
“小さな赤い家”と明るいリビングが“大きな赤い家”で包み込まれ、どこにいても家族の気配が感じられる家が、4人の男の子たちにとって、心地良い成長の場になることを願っている。*

まつした・きわ——建築家/ペンシルバニア大学美術史学科卒業。ハーバード大学大学院建築学科修了。2000～06年、横総合計画事務所。2006年、KMKa一級建築士事務所設立（是永美樹と共同主宰）。現在、工学院大学非常勤講師。主な作品：代々木107（2007）、N邸（2008）など。著書：『Harvard Design School Guide to Shopping』（共著、Taschen 2001）。

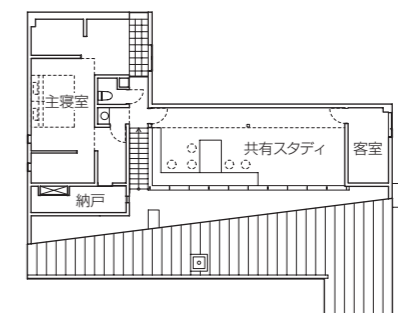
■建築概要

名称：赤の家
所在地：愛知県岡崎市
家族構成：夫婦+子供4人
敷地面積：448.97㎡
建築面積：178.51㎡
延床面積：268.34㎡
規模：地上2階
構造：木造、一部S造
工期：2007.3～2007.9
設計：松下希和/KMKa一級建築士事務所
施工：小原木材

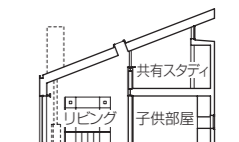
●INAX使用商品●便器：サティス、洗面化粧台：システムマーベリーナほか



1階平面図 縮尺1/350



2階平面図



A-A' 断面図 縮尺1/350